

言語の複数表現の多様性と対象認識について

—文化システムの研究(2)—

金 子 孝 吉

I はじめに

すでに別稿において、人間による世界の分類の諸形態を調査し、またそれぞれの分類の仕組みと特徴を検討することによって、人間が永い時間をかけて作りあげてきた〈文化システム〉の基本的諸類型の概観をおこなった。¹⁾本稿では、それに引き続いて、〈文化システム〉のなかでも最も重要な位置を占めるものの一つである〈言語システム〉について考察する。〈言語システム〉と一口にいてもそのカバーする領域はきわめて広範であるが、今回とりあげるのは、言語の複数表現である。具体的には、まず世界の諸言語に見られる複数表現形式の多様性を通覧し、その後、それらの表現形式と、人間が世界の諸対象を認知・把握する仕方との関連について検討を試みることにしたい。

日本人である私たちの大多数が言語の複数形というものを明確に意識させられるのは、おそらく英語を習い始めたときであるといつてよいかもしれない。

「私は本を持っている」という文を表現する際、日本語では「本」が一冊の場合でもそれ以上の場合でも表現を変える必要がないのに対し、英語では「本」が一冊の場合には“I have a book.”とし、二冊以上ある場合には“I have books.”と言わなければならないからである。日本語では、対象となる事物が単数であれ複数であれ、同じ「本」という表現形態でかまわないのに対し、英語では、〈可算的〉な名詞であれば、原則として、それが一つである場合と二つ以上ある場合とで明確な表現上の区別をおこなうことが義務的となってい

1) 拙稿「世界の分類について—文化システムの研究(1)—」(『滋賀大学経済学部研究年報』第6巻, 1999年, 45-67頁)。

るのである。

とはいえ、日本語に複数表現が存在しないということではもちろんない。「私」、「君」、「彼」などの人称代名詞においては、単複の区別は英語の場合と同様に義務的である（「私たち」、「あなた方」、「彼ら」のように表現する）。また、普通名詞の場合にも、義務的ではないにしても、複数であることを示そうと思えば、たとえば「学生たち」あるいは「学生ら」のような明確な複数表現が存在している。ただ、この「たち」のような複数接辞はすべての普通名詞のあとに置かれることができるわけではなく、通常は有生名詞のあとに限られ、「机」や「椅子」などの無生名詞に付加することは不可能である。日本語にはまた、複数を表す場合に、畳語表現といって、名詞の単数形を二つ重ねることによって対象が複数であることを示す方法もある。「我々」、「人々」、「家々」、「日々」などがその例である。だが、この表現法も、英語の -s とは違って〈生産的〉productiveなものではなく、使い方が限定されており、たとえば「*机々」とか「*本々」と言うことはできない。また、英語で houses という場合、それらの家は、互いにかなり離れたところに位置している二軒の家でも差しつかえないが、日本語で「家々」というときには、通常は、二、三軒の少ない家ではなく、もっと多くの数の、それも一つの場所に並んでいる（あるいは集合している）状態の家を指す。このように日本語の畳語形複数表現は限定的・非生産的であり、それゆえ畳語形は文法現象ではなく、個々の独立した名詞²⁾であると見なす解釈もある。

いずれにせよ日本語は、普通名詞の場合、それが単数であっても複数であっても、その違いを必ず示さねばならないというわけではない。そういった点では、英語、ドイツ語、フランス語など、私たちに比較的馴染みのあるヨーロッパの言語と比べて、日本語はおおらかであるといってよいかもしれない。英語やドイツ語などのゲルマン諸語、フランス語・スペイン語などのロマンス諸語を使う際には常に留意しなければならない単複の義務的区別は、日本語に慣れ

2) 仁田義雄「日本語名詞の数概念の表示について」(文化言語学編集委員会編『文化言語学 その提言と建設』,三省堂,1992年),604頁を参照。

た私たちの眼から見ると、正直に言っていささか面倒にも感じられるものである。日本語と同じように、普通名詞が単数であるのか複数であるのかを文法範疇として明示する必要がない言語は、モンゴル語や中国語、ヴェトナム語やマライ語など、世界にはかなり多く存在している。

だがその一方で、世界中のさまざまな言語を見渡してみると、単数と複数の二通りにしか数を区別しない英語やドイツ語より、もっと複雑で精緻な数分類をおこなう言語がいくらかでも見いだされる。それらの言語における周到で細かなカテゴリー分けは、それに出会った最初のうちは私たちを当惑させもするが、しばらく親しんでいると、今度はそうした区別があるのが当り前に感じられ、逆に、それをもたない言語があまりに大ざっぱすぎるように思えてくるから不思議である。

世界の諸言語に見られるそうした複雑な、しかも実に興味深い〈文法的数カテゴリー〉、多様な複数形表現を、以下、紙面の許す限りたくさん取りあげ、それらを整理・概観し、そののち、それらの表現形式と、それを普段使いこなしている言語グループの人たちの対象認識とのあいだに何らかの関連が見いだせないか検討してみることにしたい。

Ⅱ 単数－複数、二項体系

名詞を単数 singular と複数 plural の二通りに分類する二項の数体系をもつ言語は、すでに触れたゲルマン語族やロマンス語族などに属するヨーロッパの主要言語をはじめとして、私たち日本人には馴染み深いものであろう。

いうまでもなく、一つの存在物を示すには単数形を、二つ以上の存在物を示すには複数形を使うというのが基本である。だが、言語における単数と複数の使い分けをよく観察してみると、それほど事態は単純ではないことがわかる。

まず、義務的に単複を区別する言語の例として先ほどあげた英語であるが、必ずしも単複を区別しない名詞も見られる。それは〈不可算名詞〉あるいは〈質量語〉と呼ばれるものである。たとえば, air 「空気」, rice 「米」, furniture 「家具」などの語である。それらは、通常は複数の形をとらない。また〈絶

対複数〉, 〈絶対単数〉というようなものもある。前者の例は、英語の oats 「カラス麦」, scissors 「鋏」であり、これらは複数形でしか用いられない。一方後者は、rye 「ライ麦」のように、単数形でのみ使用される。

あるいは、語形態上は複数であるのにもかかわらず、示される対象が実際は単数であるときもある。すなわち〈威厳の複数〉, 〈謙遜の複数〉の場合である。前者は、王や国家元首その他、社会的に権威のある地位の人間が公式の場において用いる一人称や二人称の複数形である。英語の例をあげれば、“we are not amused.” 「朕は面白い」——これはヴィクトリア女王の言葉であるが、we は彼女一人を指している。フランス語にも、“Nous, président de la République” 「フランス共和国大統領たる私」などの例がある。一方〈謙遜の複数〉というのは、講演者・著者などが用いる一人称・二人称複数である。これは、話し手・書き手が自己の意見を主張するとき、それにもかかわらず自己を一方的に前面に押し出すことを避けて、聴衆や読者の賛同を得やすくするために、聴衆・読者をも含めた複数形の人称代名詞を使う用法である。そうすることによって聴衆・読者との一体感が生まれ、個人的な意見も聞き入れてもらいやすくなる効果があるのである。ドイツ語の例をあげれば、“„Jetzt kommen wir langsam zum Schluß.“ 「さあそろそろ結論に入ることにしましょう」というときの wir 「私たち」は、実質的には講演者あるいは著者一人を意味している。

このように、単数－複数という二項的区別は一見すると単純そうに思われるが、詳しく調べてみると、その内実はかなり複雑であるといえる。

ここで、複数形の表現形式の特徴についても触れておきたい。大部分の言語においては、単数形がいわゆる〈無標〉unmarked であり、複数形が〈有標〉marked である。すなわち、英語では複数形のほとんどが単数形の語尾に s を付された形で表されるように、またドイツ語で本 Buch の複数形が Bücher であるように、単数と複数がある場合、単数形が基本形態となっていて、複数形はそれになんらかの接辞や加工を施されて形成されるのである。ただし、ウェールズ語の sêr (二つ以上の星)→ seren (一つの星), helyg (二本以上の

柳)→ helygen (一本の柳)のように、単数形が有標になっているという例外もある。³⁾

Ⅲ 単数—双数—複数、三項体系

これは、複数を表す際に、対象が二つあるときと三つ以上あるときとで、語形態上の区別を設ける体系である。対象が二つのときには〈双数形〉 dual ——〈両数形〉とも呼ばれる——が用いられる。

この体系が見られる代表的な言語としては、たとえばサンスクリット語があげられる。サンスクリット語では、

一人の王 rājā	二人の王 rājānau	三人以上の王 ⁴⁾ rājānaḥ
--------------	-----------------	---------------------------------

というように、名詞の数について三種類の区別がなされる。

サンスクリット語のほか、古代ギリシャ語、ゴート語、古代教会スラブ語など、インド・ヨーロッパ語族の〈祖語〉に比較的近いとされる言葉においても、文法的数のカテゴリーは、双数を含んだ三項体系をとっている。このことから、インド・ヨーロッパ祖語はおそらく単数—双数—複数の三項体系であっただろうと推測されている。ラテン語にしても古くは双数をもっていたとされ、英語やドイツ語においても、はるか以前は双数形が存在していたという。しかし、以上あげたような言語は、現在は死語になったり、あるいはすでに双数形を消滅させてしまったりしている。現在でもなお双数形を保持しているインド・ヨーロッパ語系の言語としては、ヨーロッパの言語中もっとも保守的であるといわれるリトアニア語、それとごく一部のスラヴ語方言などである。

3) 『現代言語学辞典』(編集主幹：田中春美)，成美堂，1988年，“number”の項(432頁以下)参照。

4) 辻直四郎『サンスクリット文法』，岩波書店，1974年，44頁。

双数を論じる際に忘れてはならないのが、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトによる「双数について」⁵⁾ Über den Dualis と題された研究論文である（1827年発表）。そのなかでフンボルトは、双数表現が見いだされる言語（グループ）として、次の三つをあげている。

- 1) セム語系言語（ただしそれらが本来話されていた地域で使われているもの）
- 2) インドの諸言語
- 3) マラッカ半島、フィリピン、南洋諸島において話されている、従来同一語族と見なされてきた言語⁶⁾

フンボルトによれば、セム語では、主にアラビア語に双数が一番よく発達している。また、インドの言語としてはサンスクリット語に最も明瞭に現れるが、パーリ語では若干見受けられるだけで、プラークリット語にはまったく認められない。そして双数は、サンスクリット語などから、ギリシア語、ゲルマン諸語、スラヴ語、リトアニア語に伝わっていった。それ以外のヨーロッパの言語では、ラップランド語に双数表現が見られる。アジアにいくと、マレー語には比較的かすかに残存しているにすぎないが、タガログ語あるいはそれと深い関係にあるパンパンガ語には相当な発達が見られる。また、オーストラリアやニュージーランドの原住民の言語にも双数表現が豊富に見いだされるという。

またフンボルトは、南北両アメリカ大陸においては、極北のグリーンランド語、北米大陸の北西部のチェロキー・インディアン言語、限定された形ではあるがメキシコのベラクルス等で主に話されるトトナック語、ベネズエラのチャイマ語やタマナコ語、ペルーなどで話されているケチュア語、チリのアラウカ

5) Wilhelm von Humboldt, Über den Dualis, In: Gesammelte Schriften in 17 Bdn., Herausgegeben von der königlichen Preussischen Akademie der Wissenschaften, B. Behr's Verlag, 1907. (Unveränderter photomechanischer Nachdruck, Walter de Gruyter, Berlin 1968), Bd. 6, S. 4-30.

6) a. a. O., S. 11f.

語など、古くからこの大陸に住んでいた原住民たちの多くの言語にも双数が見いだされると述べている。

フンボルトはさらに、それらの言語の文法において双数概念が関係している範囲について、おおよそ次のように整理している。

- 1) 人称代名詞に見られる言語：双数をもつ、東アジア、フィリピンや南洋諸島で話されている諸言語、
チャイマ語、タマナコ語
- 2) 名詞に使われている言語：トトナック語
ケチュア語（明瞭なかたちではないが）
- 3) その言語のあらゆる面に双数が浸透している言語：
サンスクリット語、
セム語、
グリーンランド語、
アラウカ語、
ラップランド語（上の四言語と比べれば浸透度⁷⁾は下がる）

以上のようなフンボルトによる双数表現をもつ言語の一覧表、またそれらの言語のグループ分けは、なにぶんにも時代による制約のせいで、今日の眼からすると、いささか正確さを欠き、不完全であるといわざるをえないが、それでも双数という文法現象を、早い時期にこれだけ横断的に研究しようとした先駆性は高く評価しなければならないだろう。

以下、フンボルトの研究を基礎としつつ、だがもっと精密かつ詳細に、各言語に見られる双数表現の実態を見ていくことにする。

フンボルトがおこなった分類とは逆の順序になるが、その言語において名詞、代名詞、形容詞、動詞など、多くの品詞に双数表現が関係している言語から始

7) a. a. O., S. 18.

めることにしよう。

まず先ほど rāja (王) について言及したサンスクリット語であるが、双数概念は, rāja のような普通名詞だけでなく, 代名詞 (人称代名詞, 指示代名詞, 関係代名詞など) の変化や動詞の活用にも関係している。

たとえば人称代名詞の「私」の格変化は以下の通りである。

	私	私たち二人	私たち三人以上
主 格	aham	} āvām	vayam
目的格	mām		asmān
具 格	mayā	} āvābhyam	asmābhiḥ
与 格	mahyam		asmabhyam
従 格	mat		asmat
属 格	mama	} āvayoḥ	asmākam
位 格	mayi		asmāsu ⁸⁾

動詞も, 主語が単数であるか双数であるか複数であるかによって三通りの人称変化をする。例として, 「運ぶ」 bhr- の3人称の (能動態) 現在時称の人称変化を以下に示す。

彼らは運ぶ bharati	彼ら二人は運ぶ bharataḥ	彼ら三人以上は運ぶ ⁹⁾ bharanti
------------------	---------------------	-------------------------------------

サンスクリット語とは違って現在でも話されている生きた言語であるエスキモー語 (西エスキモー語ユピック方言) でも, 文法的な数は, 単数-双数-複

8) 辻, 前掲書, 69頁。

9) 辻, 前掲書, 118頁。

数の三項体系となっている。この言語でも、普通名詞であれ代名詞であれ、事物・人間が二つ（二人）のときには双数を使用しなければならない。ボートの数を表すときは以下のようなになる（絶対格の場合）。

一艘のボート anyaq	二艘のボート anyak	三艘以上のボート ¹⁰⁾ anyat
-----------------	-----------------	----------------------------------

西エスキモー語では、事物の所有者を接尾辞をつけて示すが、そこでも数の三項分類が見いだされる。ここでは、ボート（一艘）の所有者を表す表現のうち、一人称と二人称が所有者である場合の変化をあけておく（格は絶対格）。

私のボート anyaqa	私たち二人のボート anyaḡpuk	私たち三人以上のボート anyaḡput
君のボート anyan	君たち二人のボート anyaḡtək	君たち三人以上のボート ¹¹⁾ anyaḡci

フンボルトが分類している通り、サンスクリット語やエスキモー語のように双数表現がその言語の多方面に係わっている言語グループがある一方で、タマナコ語やチャイマ語のように、人称代名詞においてだけ双数と複数を区別することが義務づけられている言語もある。

北米インディアン諸語のなかでもとりわけ有名なホピ語の場合には、普通名詞に数範疇の三分類が見られる（「一人の女の子」maana, 「二人の女の子」maanavit, 「三人以上の女の子」¹²⁾mamant）が、同じ北米インディアン諸語に

10) 宮岡伯人『エスキモーの言語と文化』, 弘文堂, 1978年, 125頁。

11) 同書, 131頁。

属するヨクト語のウィクタムニ(Wikchamni) 方言においては、普通名詞は単数－複数の二項対立しかなく、代名詞にのみ次のような三項の区別がある。

あなた maʔ	あなた方二人 maʔan	あなた方三人以上 ¹³⁾ maʔakʔ
------------	-----------------	-----------------------------------

ポリネシアのサモア語の場合も、ヨクト語（ウィクタムニ方言）と同じである。サモア語の名詞は、若干の例外（たとえば「子供」：単数 tamaitiiti；複数 tamaiti¹⁴⁾）はあるにしても、それらを除けば名詞の数による語形の変化はない。しかし代名詞に関しては、単数－双数－複数の三つの区別がある。たとえば二人称の代名詞（主語で、動詞の前に置かれるときの語形）は以下のとおりである。

あなたは 'e	あなた方二人は lua ; 'oulua	あなた方三人以上は ¹⁵⁾ tou ; 'outou
------------	-------------------------	--

サモア語の代名詞の一人称の場合には、もう少し複雑なシステムになる。というのは、双数と複数において〈除外形〉exclusive と〈包含形〉inclusive の区別がさらに付け加わるからである。除外形とは、対話者を除外した「私たち」を指し、包含形は対話者を含んだ「私たち」を指す。わかりやすくするために例文を使えば、「私たちはあなたを待っていました」の「私たち」は除外形であるが、目の前にいる相手に対して「私たちはいっしょに旅に出ることに

12) 亀井・河野・千野編『言語学大辞典』第3巻、三省堂、1992年、「ホビ語」の項（1118頁以下）参照。

13) Geoffrey Gamble, Wikchamni grammar, University of California Press, 1978, pp.94, 101.

14) 岩佐嘉親『サモア語入門』, 泰流社, 1989年, 23頁。

15) 同書, 49－50頁。

しましょう」と相手を誘うような場合の「私たち」は包含形である。そうした区別は、英語の *we* , ドイツ語の *wir* , フランス語の *nous* などにはなく、普段それで別段不便を感じてはいないのであるが、よくよく考えて見れば、一人称の複数の場合、それは決して、同じく「私」という存在がクローン人間のよう複数存在する事態は通常ありえないわけであり、「私たち」という場合に、あなたが含まれているのか除外されているのかを区別することは人間関係を明確にするうえでは、かなり重要であるともいえるのである。こうした一人称複数における除外形と包含形をはっきり区別する文法は、ヨーロッパ大陸の言語には例がないにしても、その他の大陸に眼を向けるときには非常に広範囲に豊饒に見いだされるものである。さて、サモア語の一人称代名詞は、結局次のようになる。

〈除外形〉

私は
'ou ; o'u

私たち二人は
mā ; mā'ua

私たち三人以上は
matou

〈包含形〉

私は
ta

私たち二人は
tā ; tā'ua

私たち三人以上は ¹⁶⁾
tatou

少なからぬ言語に〈双数〉という文法範疇が存在するのは、人間を取り巻いている世界のなかに、二つが対をなしている事物が数多く見いだされるからだと一般には考えられている。なるほど、人間の身体を見ても、眼、耳、手、足、肩、膝をはじめとして、二つ一組で存在しているものが多い。動物や植物にしても、無生物にしても、あるいは人間が人工的に作った道具や器具（車輪、扉など）にしても対になっている場合がたくさん見られる。そういった具体的な

16) 同書、49頁。この表の一人称単数包含形の *ta* は、謙遜の意を込めて、同情、愛、援助を懇請するときに使用される（同書、193頁参照）。

事実から、双数という特別な数カテゴリーが生じてきたとする推測は一応首肯できるといえる。また、そう考えるならば、双数表現が、上で述べたような「両眼」・「両手」などの対偶物を表す際に最も頻繁に使用されることになったのも納得できるのである。だが、双数表現が存在する理由はそれだけではないと思われる。しかし、それについては一番最後に触れることにしたい。

三項体系の数範疇をもつ言語の最後の例として、これまで見てきた言語と同様に単数－双数－複数の三項体系をもちながらも、それらとは少し異なる双数の使い方をする言語があるので、それをここで取りあげておくことにする。

グリーソンによれば、セム語に属するヘブライ語はかつてある時代に単数－双数－複数の三つの数範疇をもっていたが、その際、双数はあくまで、一つの対をなす二つの事物をさすだけで、対をなさない二つの事物は複数形で表したということである。たとえば「/yaadáyim/「手」は同一人物の両手」を指すが、それに対し、「/yaadfiin/ はどれでも三つまたはそれ以上の手か、またはたとえば私の片手とあなたの片手とをさし、私の両手はささない」というようになっていたとされる。¹⁷⁾すなわち、単なる偶然的に二つ存在しているような場合には、双数表現を使わないわけである。

IV 単数－双数－三数－複数，四項体系

これは、対象が三つあるときにそれを表現する特別な三数 trial という語形を備えている体系である。この体系をもつ言語は、単数－双数－複数の三項体系言語と比べればずっと少なくなる。また、四項体系が現れるのは、主として代名詞の場合に限られ、すべての名詞類や動詞までに四項的区別の適用を一貫して義務づけしている言語はいまのところ存在しないといわれている。

代名詞に、三数を加えた四項体系が見られる言語としてよく知られているのは、ポリネシアのフィジー語である。フィジー語の一人称にも、除外形と包含形の区別がある。

17) H. A. グリーソン『記述言語学』（竹林滋・横山一郎訳）、大修館書店、1970年、255頁。

	単数	双数	三数	複数
一人称 (除外形)	au	keirau	keitou	keimami
一人称 (包含形)	—	edaru	edatou	eda
二人称	ko	(ko) drau	(ko) dou	konī
三人称	koya	erau	eratou	era ¹⁸⁾

フィジー語の双数、三数はそれぞれ、複数形に数詞の二(*aru)および(*tolu)が接尾した形に由来するといわれている¹⁹⁾。また、岩佐によれば、フィジー語の代名詞に見られる三数は元来は「三人」を示すものであったが、現在では必ずしも三人に限らず、「若干の人々」の意味で使われているとのことである²⁰⁾。また、その三数は「(たくさんに対する)少数」を表すことが多く、従って〈少数〉paucal²¹⁾とも呼ばれることがあるという。

もう一つ、四項体系の数カテゴリーをもっている言語として、私たちにとってきわめて透明な形でその構造を理解させてくれる言語があるので、ここで取りあげておこう。ピジン・クレオールの代表的言語として名高いパプアニューギニアのトク・ピシン語である。

トク・ピシンの代名詞の数は、単数—双数—複数の三項体系とする文法書もあるが²²⁾、ここでは、ワームとミュールホイスラーが整理した、三数を含めた四項体系となっている代名詞の一覧表を次にあげることにする。²³⁾

18) 岩佐嘉親『フィジー語入門』, 泰流社, 1985年, 37頁。

19) 松本克己「〈数〉の文法化とその認知的基盤」(月刊『言語』, 大修館書店, 1993年10月号, 36-43頁)。この論文は短いものでありながら、世界の諸言語の多様な複数表現が要領よく概観されている。

20) 岩佐嘉親『フィジー語入門』, 35頁。

21) 亀井他編『言語学大辞典』第6巻「述語編」, 三省堂, 1996年, 「三数」の項(616頁以下)参照。

22) 岩佐嘉親『新ニューギニア語入門』, 大陸書房, 1975年, 86-87頁。

23) S. A. Wurm & P. Mühlhäusler, Handbook of Tok Pisin, 1985, pp. 343-344.

	単数	双数	三数	複数
一人称 (除外形)	mi	mitupela	mitripela	mipela
一人称 (包含形)	—	yumitupela	yumitripela	yumi
二人称	yu	yutupela	yutripela	yupela
三人称	em	(em) tupela	(em) tripela	(em) ol

トク・ピシンは、英語を基盤に現地語のトライ語の要素を多く取りいれた言葉であるので、私たちにも、上の表における人称代名詞の構成の仕組みが手に取るように理解できるといえよう。上の表の mi, yu, em はそれぞれ英語の me, you, him に、tu, tri は two, three に由来する。pela は fellow であり、ol は all である。すなわち、たとえば一人称除外形の双数は「私たち二人・仲間」であり、一人称包含形の三数は「あなたと私たち二人・仲間」という意味なのである。該当する人物たちと合計人数が実に具体的に表現されている点で、私たちにはたいへんわかりやすい数体系となっている。

そのほか、人称代名詞において単数－双数－三数－複数の四項体系をもつ言語としては、トク・ピシンの土台を形作ったトライ語（パプアニューギニア）、インドネシアのタラウト諸島で話されているタラウト語、イリアンジャヤのヨタファ湾内で、水上家屋に住むトバティ族が話すトバティ語などがある。²⁴⁾

以上は人称代名詞に見られる四項体系であるが、オーストラリアのマングライ語では、代名詞以外の一部の名詞類においても、そうした四項体系が見られる。すなわち、マングライ語では、親族名詞のなかの特別の血縁集団を表す名称²⁵⁾だけは三数表現をもっているという。

24) 亀井他編『言語学大辞典』第2巻、三省堂、1989年、「トライ語」の項（1339頁以下）、「タラウト語」の項（674頁以下）、「トバティ語」の項目（1326頁以下）を参照。

25) F. Merlan, Mangarayi, *Lingua Descriptive Studies* 4, 1982, 85ff. (松本克己、前掲論文から引用。)

ここで、さらに、文法的数範疇が四項体系でありながら、単数-双数-三数-複数という構成要素ではなく、別の分け方がなされている例を三つ見ておくことにする。

まず一つは、先ほどフィジー語に触れた際に言及した〈少数〉paucal という複数カテゴリーが、三数の代わりの位置を占めている体系である。すなわち、単数-双数-少数-多数という四区別である。たとえば、ポリネシア諸語に属するハワイ語がその例である。ハワイ語の名詞には「少し」という意味合いを表す〈少数形〉があり、それよりも多いものを指す〈多数形〉と区別されるとい²⁶⁾う。そして、そういった四項体系はオーストロネシア諸語によく見られるとい²⁷⁾う。

二つめは、ミクロネシアのモキル語である。モキル語でも、代名詞の数は四項体系をなしている。単数と双数があるのは他の言語と同じだが、残りの二つのカテゴリーは「近い複数」と「遠い複数」と呼ばれるものである。「近い複数」は、発話の現場に居合わせている人々を指すのに対し、「遠い複数」は、その場²⁷⁾にいない多くの人々を漠然と含めて指すときに用いる。

三つめは、ラオスの最北端ポンサリィで話されているプノイ語である。プノイ語は、単数-双数-複数-超数という四項体系をもつ。一人称であれば、「私」²⁸⁾、「私たち二人」、「均質な私たち」、「均質でない私たち」という区別をおこなう。ここで「均質」か「均質でない」かというのは、兄弟のような関係にあるか、そうではないかという意味である。

V 五項体系

言語の数カテゴリーが五つであるとき、その五要素は言語によって違いがある。

26) 松本克己、前掲論文参照。

27) 亀井他編『言語学大辞典』第4巻、三省堂、1992年、「モキル語」の項(439頁以下)参照。

28) クロード・アジェージュ『言語構造と普遍性』(東郷・春木・藤村訳)、白水社、1990年、125頁。

まず、単数－双数－三数－四数－複数というような区別をする言語に、ミクロネシアのマーシャル語がある。しかし、マーシャル語の代名詞において単数と複数の区別は義務的であるが、その他の代名詞の数の区別は必要に応じて随意的に形成されるものである。代名詞の数を細かく表すときには、代名詞の複数形に、-ro (2), -jeel (3), -eañ (4), -uij (5以上)をつけることによって、双数、三数、四数 (quadral), 五数 (pental) 以上を表すことが可能である。その接尾辞の語源はそれぞれ、ruo「2」, jilu「3」, emān「4」, bwijin「たくさん」に遡る。たとえば、3人称の場合、普通は単数が e, 複数が er であるが、さらに詳しく分けて表現したいときには、次のようになる（呼びかけなどのときに独立して用いられる絶対形の場合）。

彼一人 e	彼ら二人 erro	彼ら三人 erjeel	彼ら四人 ereañ	彼ら五人以上 ²⁹⁾ eruij
----------	--------------	----------------	---------------	--------------------------------

また、すでに死語ではあるが、インド・ヨーロッパ語族に属し、主として仏典の翻訳文献として知られるトカラ語B方言の五項体系では、その構成要素は、単数－対数－双数－複数－複個数の五つとなっている。「対数」も「双数」も、事物が二つあることを示すのであるが、「対数」（ラテン語 *numerus paralis*）は、sarne（両手）のように、自然界で本来的に対をなす二つのものを指すのに対し、一方、双数はいうならば偶然的にいっしょにある二つのものを表す。また、「複数」と「複個数」の違いは、前者が ost(u)wa（3軒以上の家）のようなものを指すのに対し、後者は ost(u)waiwenta（個々の家々）のように、一軒一軒の家の個性性を尊重しながら、全体として複数の概念を表すという点にある。³⁰⁾

29) 亀井他編『言語学大辞典』第4巻、三省堂、1992年、「マーシャル語」の項（68頁以下）参照，また同辞典第6巻「述語編」，1996年、「三数」の項目（616頁以下）も参照。

30) 『現代言語学辞典』（編集主幹：田中春美），成美堂，1988年，“number”の項（432頁以下）参照。

VI その他の体系

その他の複数表現システムとして注目されるのは、まず、現代アラビア語のカイロ方言にみられる〈集合複数〉と〈個別複数〉の区別、あるいは〈内部屈折複数〉という数カテゴリーである。

IIで見たように、単数と複数とでは、一般に前者が無標、後者が有標なのであるが、松本によれば、現代アラビア語の方言では、後者が無標で、前者が有標というケースが見いだされるという。たとえば、「レモン」の場合には、もっとも無標な形 *lamuun* は集合複数を表す。それに接辞 *-a* が付いた *lamuuna* が「一個のレモン」を意味する個別単数であり、その複数形 *lamuunaat* が「数個のレモン」を意味する個別複数を表すのである。また、一部の名詞には、内部屈折複数という形がある。たとえば、*šagar*「樹木」には、個別複数 *šgaraat* と並んで、³¹⁾ *'ašgaar* という「多種多様な樹木」を意味する内部屈折複数形がある。

そもそもアラビア語は、現在非常に多くの話者をもつ言語としては、最も豊かな複数表現をそなえた言語の一つであるといえる。アラビア語では、代名詞だけでなく、普通の名詞や動詞、さらにはときに形容詞までも、単数-双数-複数の三つの区別を厳格におこなう。また、複数の場合でも、対象が三〜九個の場合と十以上の場合とでは、数詞の付け方やその後に置かれる名詞の形が異³²⁾なってくるのである。

あるいは、IVで取りあげた単数-双数-三数-複数の代名詞の四項体系の数範疇をもつフィジー語には、普通名詞において、ときに、十個、百個、千個を表す場合の特別な語形がある。それは、ヤシの実、カヌー、魚、海亀、豚など、フィジーの人々の生活と密接な関係をもっている事物の場合である。たとえば、ヤシの実百個に *koro*、ヤシの実千個に *a selavo* という特別な語が用意されて³³⁾いるのである。

31) 松本克己、前掲論文を参照。

32) W. ライト『アラビア語文典』（後藤三男訳）、上巻、ごとう書房、1987年、325頁参照。

33) エルンスト・カッシーラー『シンボル形式の哲学』第1巻「言語」（生松敬三・木田ノ

Ⅶ 多様な複数表現形態の生成理由とその衰退原因

以上見てきたとおり、世界中のさまざまな言語を見渡してみると、双数をはじめとして三数、四数、あるいは少数、多数などといった複雑な文法的数範疇が存在していることがわかった。では、それら双数や三数などの文法的区別はどのような事情で生まれてきたのだろうか。それが特定の言語に存在していることと、その言語を使う人々の対象認識とのあいだになにか関係があるのだろうか。あるいは、双数や三数のような表現形式は、おそらく古い時代には、もっと多くの言語に見られたと推測されているのに——英語やドイツ語などにも双数形が以前はあった——、時代が進むにつれて衰退あるいは消滅していったのは、なぜなのか。

双数表現の存在理由については、すでにⅢにおいて一度触れた。すなわち、私たちの周囲に〈対〉をなして存在している事物が多数あることに双数形の生成原因を見えるというものであった。それはそれで納得できる推測ではあるのだが、その場合には、三数とか四数表現が存在することをどう説明するのだろうか。それらを用いる人々の生活世界では、三つの事物や四つの事物が特別なまとまりを成していることが多いのだろうか。たぶんそうではないと思われる。

双数、三数、四数などの特別な名詞形態が生成した理由を一つに絞り込むのはおそらく不可能だろう。私たちにできるのは、以下のようないくつかの理由を推察してみることだけである。

まず一つの考え方として、事物が複数あるとき、それが二つであるか、三つであるか、さらには四つであるか、それ以上であるかを、特別に名詞の形態を変えてまで文法的に明示するのは、単純に考えれば、そうすることが必要だったから、ということができるかもしれない。たとえば、自己の所有物を数える、またはそれを他人に贈与したり、あるいは他人との間で何かと交換する交渉をしたりする際、その事物の数を明瞭に区別するために、単に数詞をつけて言う

↘元訳）、岩波書店、1989年、313頁を参照。また、Robert Codrington, *The Melanesian Languages*, Philo Press, 1974 (Reprint of the Edition Oxford 1885), pp. 241–242を参照。

だけでなく、名詞自体をもはっきりと形を変化させて表現したのではないかという考え方である。世界に存在しているあらゆる事物を、一つを示す単数と二つ以上を示す複数のたった二通りにしか区別しないというのは、どうみても大ざっぱすぎる——そう考えるのはきわめて当然であると思われる。とくに人間を指す代名詞の場合には、それが複数であるときに、その中身が実際に二人か三人か、あるいはそれ以上かということは、本来、普通名詞の場合より、もっと重要なことであっただろう。さらに、「私たち」というとき、その「私たち」のなかに、向かい合っている相手である「汝」が含まれているのか否かということも、同様に無視できないことだったであろう（そのために一人称代名詞の複数には包含形と排除形があるのだと思われる）。とりわけ人称代名詞における細かな数の区分は、昔、共同体社会において人間関係がかなり狭い範囲に限られ、また人間関係が今日よりも遥かに濃密であった時代、自分たちの氏族とそれを取り巻く他の諸氏族・諸部族が彼らの体験する世界のほとんどすべてであったような時代には、非常に大切なことだったであろう。そうした時代には、他の人々と友好的に共同作業をする場合でも、あるいは敵対的な関係にあって対立している場合でも、もろもろの交渉または戦争を遂行する際に、「私たち」というときの中身や正確な人数、相手のきちんとした人数がすぐに了解できるような表現形式があった方がよかったということは十分に想像できる。——だが、時代が進むにつれて、人間が経験する世界範囲は拡大し、つきあう人間の数も飛躍的に増大していった。大量の人間たちと表面的な交際をこなしていくには、二人や三人を表す細かな数表現に拘泥している余裕はない。こうして、双数をはじめとする多様な複数表現は衰退し、名詞の数は数詞を付けることだけですからませるようになった。複数表現の衰退の歴史を、そのように考えてみることは可能だと思われる。

あるいは、単数－双数－複数のような文法的数範疇の存在は、人類の根本的な数の数え方と関連づけることによって説明できるかもしれない。先行論文でも述べたが、始源の社会においては人間は数を「三」までしかもっていなかつ

34) 拙稿〔注の1)にあげた論文〕、54－55頁参照。

たといわれている。いや、ごく近い時代まで、文明から遠い場所にあった社会では、事物や人間を数えるときに、「一」、「二」と数え、それ以上は「たくさん」といってすませている場面が実際見受けられたのである。むしろそれは、三以上の事物が存在している事態を認識できないことを意味してはいない。南米のアビボン族は、三以上の数は「たくさん」ですませていたが、たくさん飼っていた犬のうちの一匹でもいなくなれば、すぐにわかったのだった。家畜の群れから一頭がいなくなかったことは、近代人の場合には、いちいち家畜の数を勘定してみなければ気づかないのであるが、アビボン人たちは、数えずとも、すぐにどの一頭がいなくなつたのかわかるのである。文明社会の人間は家畜を〈数量〉で管理するが、始源社会の人々は家畜一頭一頭を個別的にそれぞれの特殊性や〈質〉によって把握していたのである。考えてみれば、そもそも人間が一眼で直感的に把握できる対象の数はけっして大きくはなく、せいぜい三個から四、五個くらいまでであろう。それ以上多い場合には、私たちは、順番に数えていかなければ把握できないはずである。それに、人間が日常生活を送る際に必要とされる数もそれほど大きくはない。なにかの対象を見たとき、三か、せいぜい四、五くらいまで数がわかれれば、私たちにしても、普段、それ以上数えるのは省略して、「たくさんある」ですませているのではないか。

Ⅳで取りあげたフィジー語では、三数は、「三人」を表すと同時に「若干の人々」をも指していた。これも、「三」という数が必ずしも厳密に三つあることを意味せず、三つ以上の数をも表すことを示している。南アメリカ最南端のフエゴ島で話されているヤーガン語では、数詞は一、二、三までしかないが、そこでの三はやはり「若干」を意味していた。³⁵⁾

すなわち、人類にとっての根本的な数体系が「一」と「二」と「三以上」の三分区であるとすれば、それが、人称代名詞あるいは普通名詞における単数—双数—複数という三項的文法範疇にも、そのままの形で反映されていると考えてもよいのではないか。

さらにまた、次のように考えることができるかもしれない。すなわち、古い

35) 同稿、同頁参照。

時代に生きてきた人々、あるいは、現代でも、産業機械文明の影響をそれほど強く受けることなしに伝統的な生活を送り続けている人々が、双数や三数などの細かな複数区別を設けていた（いる）のは、その人々が、人間（事物）が二人いる（二つある）ことと、三人いる（三つある）こと、さらにそれ以上いる（ある）ことのあいだに、無視できない〈断絶〉があることを感じていたからではないかと。その〈断絶〉は、同規格の製品を大量生産・販売する産業文明に浸りきっている現代人にはもはや想像が困難なものである。工業的・産業的人間にとっては、数は1から2へ、2から3へ、3から4へと〈連続〉的につながっているものであり、3は2に1を加えたものにすぎず、4も3に1を加えたもの以上の意味は有していない。事物どころか人間までもが平均化・均質化した時代にあつては、人間が二人いるときでも三人いるときでも、それはいわば物理的な量の違いにすぎない。だが、実際は人間が二人でいるときと、三人でいるとき、あるいはそれ以上でいるときとでは、人文・社会科学的な視点からすれば、そこで繰りひろげられる人間関係はおおいに異なってくるのである。

カッシーラーは『シンボル形式の哲学』第1巻「言語」で「数概念の言語的發展」について論じているが、そこで、「厳密に統一的な原理によって構成された一全体としての数列の観念が強く浸透すればするほど、個々の数は特殊な内容を代理するものではなく、他のすべての数と等価な単なる位置になっていく³⁶⁾」と述べている。数え方の近代化とは、数というものを、規則的に増加していく単なる連続した「数列」と見なすことだった。しかし本来は、「一」は「一」ならではの特性をもち、「二」や「三」もそれぞれの「特殊な内容」を備えもっていたのである。とくに人間の場合には、一人単独でいるときと、二人で対話あるいは対決するときと、三人目が入ってきて事態がさらに複雑化するときとでは、状況が大きく違ってくるのである。人間関係を示す人称代名詞に最も根強く双数や三数の文法形式が残存しているのは、そのせいだと考えてよいと思われる。

36) カッシーラー、前掲書、331頁。

英語やドイツ語をはじめとするヨーロッパ系の言語では、以前は存在していた双数形が現代では消滅してしまった。一方、それ以外の地域で使われている伝統的言語においては、双数や三数という文法形式がなおも生き続けている。そのことは、やはり西欧地域において大量生産を旨とする産業文明が高度に発達したことで無関係ではないといえよう。カッシーラーはまた、「双数の退化は個別的・具体的な数から系列をなす数への漸進的な、不断に進行する移行と符合している³⁷⁾」とも述べている。結局、双数や三数、あるいは少数や多数などの細分化した複数表現が存在しているのは、人類がひとつひとつの〈数〉の個別性・特殊性を深く感じていることの現れと見なすことができるのではないか。また、それらの複数文法範疇の漸進的衰退は、文明の発達によって、人々の抱く数概念・数認識が変化したことの原因が求められるのではないか。

多様な複数表現の存在理由を一つに限定することはできないだろうし、またそれらの衰退原因も複合的であろう。ただ私としては、一番最後に取りあげたカッシーラーの見解が、すべてを説明しているとはいえないにしても、現時点では最も傾聴すべきものではないかと思っている。(2000.4.10)

37) 同書、同頁。